

哲学的問い: 自証以外に確かめる手立てはあるのか? 西田の主張を私が確認する方法は何か。

・自証について

自証はただ直接経験の事実であり、体験しかできないことであるが、自証をただ個人の内に「自証の事実だ」という形で終わっていいのか (佐野先生)。また、自証を確かめるということはすでに自証の事実から離れてしまうという意見も出た。自証をあえて言葉にすること、即ち哲学をすることはいったいどうなることであるのか (佐野先生)。そして、以下の問いが問われた。

・「哲学をすることとは人間の普遍的な営みであるのか。それとも、専門家の営みであるのか。」

この問いに対する議論として、「哲学は天才なものであって、哲学することは枯れ草を食うのではなく、もっと豊かなことである」という意見が出された。それに対して、ある方は「自証の事実には必ず何の手段で、例えば、哲学の場合は言葉、美術の場合は絵とか何らかの形を取って伝えられる。しかし、存在がある存在物を媒介して説明することは何らかの歪みが生じるはずである。三次元に住んでいる人間である以上それは仕方がないが、哲学者は常に考えて、理論を深めていくのである」と述べた。また、「哲学的思索が重要である」や「哲学的問い、例えば人生の意義はすべての人間存在にかかっている」や「言葉を使ってはじめて、人間になるので、哲学的問いを持っていない人がいない」などの意見が出された。その最後、佐野先生が「哲学すること即ち人間がどこまでも分からないもの、深いものに触れて言葉にせざるをえないからである」と述べて、ひとまずこの議論を終わった。

本文要約

『認識論における純論理派の主張について』の最後の部分 (P234) と『論理の理解と数理の理解』の「此處に所謂無限の真相がある... 思惟の無限性に由るのである」(P264) までど読了

・理性推理の無限進行は自覚の事実に基づいて自証し得るのである。経験の発展なくして思惟の発展が有り得ない。

・転化や統一や自覚とかいうのは唯直接自証の事実であり、直接経験を離れて作為せられた概念としての心理作用 (理解作用) ではない、自動的事実を離れて意味も理想もないというのである。

・思惟の内容と作用と分れるのは分析の結果、作為さられたものを見る故である。思惟は真に思惟の経験に純一なることによってその発展を見ることが出来る。分析は一種の内面生活に純一なることによって徹底的となるのである。

・論理的理解

論理的理解は特殊なるものを一般なるものの中に包摂することである。所謂推論式はこの形式である。しかし、包摂するということは単に我々は推論式によって単に大前提の中に含まれたる過去の経験を引き出すのではない。論理的推論

というのはいつでも一般より特殊に行くことである、即ち一般的なるものが内より必然的に自己自身を発展することである。

論理的理解ということは一般的なる或物の内面的発展である、即ち一種の創造作用である。

- ・無限の真相

無限の系列は直覚（感性的直観）によって与えられるものではない。時間空間の無限という直覚の形式に理性の無限なる総合を当て嵌めて生ずるのである、無限の性質は之を思惟の中に求めねばならない。無限とは単に有限の否定ではない、真に無限なるものは己自身の中に変化の動機を蔵しているものである、即ち自己自身にて分化発展するものである。

・デデキントによれば、ある体系が自分の中に自分を写し得る時に無限である、即ロイスの所謂自己代表的体系が無限である。デデキントも「自分の思想の対象となり得る自分の思想界は無限である」といつている。即ち我々は我々の反省的意識において、自己を思惟の対象とすることはまた自己の思惟の対象とすることができる。

哲学的問い：自覚とは反省と直観を統一することである。自覚はどのようなふうに命の世界（下）と分別の世界（上）即ち反省と直観を関係づけるのか。

筆記 唐露